

親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する文献的研究

野口, 康彦

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

59

(開始ページ / Start Page)

133

(終了ページ / End Page)

142

(発行年 / Year)

2007-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002882>

親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する文献的研究

人間社会研究科 人間福祉専攻
博士後期課程3年 野口康彦

I 問題と目的

昨今、わが国における離婚率及び離婚件数は増加傾向にある。戦後、日本の離婚率は長期にわたって低位で推移してきており、1990年代前半までは、0.7～1.6の間であった。大きな変化がみられたのは、バブル景気崩壊後の1992年以降であり、2002年の離婚件数は2.30となり史上最多となった^①。西欧主要国の離婚率は2～3%程度であり、日本の離婚率は欧米より低い水準で推移してきたが、最近の状況ではならんだと言える^②。一方、離婚件数は1964年から増加し、1980年代後半に一時減少したが、1991年から再び増加傾向となり、やはり離婚率とともに2002年には28万9,836組と過去最高となった。また、離婚の増加に伴って、親が離婚を経験する未成年の子どもの数も増えている。湯沢（2003）は、親の離婚時における1人以上の未成年の子どものいる割合は、離婚した親の全体の約6割になると指摘している。

欧米を中心とした海外の国々においても、離婚の増加の傾向がみられている。特に、アメリカでは1960年から1975年の間に離婚率は2倍になり、1990年代の終わりには、年間100万件の離婚が起きるようになった（Kuehn, 2001）。Harvey（2003）は、1990年代にはアメリカの国内の5割から6割の子どもたちが、18歳になるまでのある期間、離婚が生じている家庭で過ごしていると指摘している。このような背景もあり、アメリカでは、1970年代から親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響に関する論議が盛んに行われている。

アメリカの現状は既述した通りであるが、わが国では親の離婚と子どもの精神発達に関する視点からの研究は未だに少ない。医療や福祉、教育の現場で子どもとかかわる立場にある者は、親の離婚は子どもの精神発達にどのような影響を及ぼすのかということについて理解を深めることが求められているのではないだろうか。

本稿では、親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する国内外の文献を展望することで得られた知見を整理し、未だ検討されていない研究課題について考察を行った。なお、本論における子どもの定義は、親とその子どもという意味合いで用いており、中心となる年代は18歳未満であるが、既存の研究によっては18歳以上となり、さらに、成人して結婚し子どもができて親になった場合も含んでいる。

II 方法

1. 海外における親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究

1970年代から現在まで、親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する代表的な研究を検索した。研究者と発表年及び概要について、表1-1および表1-2に示した。

2. わが国における親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究

1980年代から現在まで、わが国における親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する代表的な研究を検索した。研究者と発表年及び概要について、表2に示した。

① 厚生統計協会、「人口統計資料集」2005年

② 厚生統計協会「人口の動向—日本と世界」人口資料集2005年

表 1 - 1 海外における親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究

研究者	発表年	概要
Santrock JW	1972	286の父親不在の家族と57の父親が同居する子どもとを比較し、知的能力を測る検査を行った。
Wallerstein JS et al	1975	離婚した27家族とその就学時前の2歳から6歳の34人の子どもを対象としたインタビューと観察法による調査。
Hetherington E M.	1976	就学前の子どものいる離婚した48の家族へのインタビュー調査。
Sorosky AD	1977	先行研究のレビュー
Kalter N et al	1981	親が離婚した7歳から17歳までの144人の外来患者の検討。
Fine M et al	1983	7年以上前に、親が離婚した100名の大学生と親が離婚していない141名の大学生に対して、質問紙による調査を行った。
Wallerstein JS	1985	親の離婚を経験した子どもたちの10年後のインタビューによる追跡調査。
Hetherington E M et al	1985	親の離婚を経験した124人の子どもの6年間の縦断的な調査による検討。
Loeb L	1986	親が離婚した3人の男児の事例研究。
Block JH	1986	41の離婚あるいは別居の状態にある家族と60の離婚をしていない家族の子どもについて、質問紙を用いて比較検討した。
Cooney T M et al	1986	親の離婚を経験してから3年以上経った18歳から21歳までの女子学生に対して半構造化面接を行った。
Borduin CM et al	1987	離婚を経験し、父親が不在の青年期の男子への観察法と質問紙による調査。
Baum CG	1989	親の離婚を経験した子どもの行為障害と反社会的行動に関する報告。

表 1 - 2

研究者	発表年	概要
Hetherington EM	1990	親の離婚を経験した子どもを含む180の家族について、縦断的な研究を行ったうえでの分析と検討。
Arnold LE	1990	先行研究のレビュー。
Amato PR et al	1991	子どもの時に親の離婚を経験した成人に関する32の研究を集積してメタ分析。
Amato PR et al	1991	92の既存の研究から、合計13000人の子どもについてのメタ分析。
Buchanan CM et al	1991	親の離婚から4年半が経過した10歳半から18歳までの517名の子どもへの電話によるインタビュー調査。
Amato PR et al	1991	親の離婚を経験した152人の成人と親の離婚を経験していない1091人の成人の比較検討。
Cherlin A et al	1991	アメリカとイギリスの7歳から11歳までの親の離婚を経験した子どもに対するインタビュー調査。
Garber B	1992	心理治療における逆転移の反応について、死別を経験した子どもと親の離婚を経験した子どもとの比較検討。
Gately D et al	1992	先行研究のレビュー。
Frasciello LM	1995	神経性無食欲症と診断された13歳のある少年の事例研究。
Weiner J et al	1995	親の離婚を経験した90人の大学生と親の離婚を経験していない347人の大学生とを比較検討。
Johnson P et al	1995	19歳から53歳までの125人の学生（うち88人が女子）に対して、質問紙と家族環境のスケールを用いた調査を行った。

Paterson WA et al	1997	5組の一人親家庭に対する質的研究。
Kleinman NQ et al	1998	18歳から24歳までの115人の女子学生を対象に、MMP I - IIの自我強度尺度 (Ego Strength Scale) を用いた調査。
Wallerstein JS	2000	親の離婚を経験した子どもの25年後のインタビューによる追跡調査。
Reifman A et al	2001	1990年から1999年の間に公刊された親の離婚を経験した子どもに関する35の研究についてメタ分析を行った。
Hetherington E M	2003	3つの縦断的な研究から、親の離婚の影響を少なくするための、ソーシャルサポートの重要性を指摘した。
Crespi T D et al	2005	親の離婚を経験した子どもたちへの、学校におけるグループカウンセリングの有効性について検討した。
Kilmann PR	2006	3つの質問紙により、親の離婚を経験した157人の女子学生とそうでない147人の女子学生に対して、主として愛着のパターンと親の特徴の記憶に関する比較検討を行った。

表2 わが国における親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究

研究者 (団体も含む)	発表年	概要
渡辺久子、他	1985	精神科に外来受診及び入院した死別を含めた離別の体験を持つ6人の子どもの症例の検討。
増井玲子	1986	精神科の受診において、主として親の離婚を経験した20歳未満の男女 (生別群、48名) について、同じ基準で親の死別群 (51名)、親の健在群 (93名)、生別再婚群 (19名)、死別再婚群 (10名) のデータを比較検討した。
佐々木美智子	1992	少年院在院中の少年208人と一般中学に在学している少年448人に対する質問紙による調査。
土屋伸子、他	1992	37施設の児童を対象とし、離婚家庭の145名の児童と比較対照となる両親と同居していた540名の児童の行動観察。
泉ひさ	1994	国内外の先行研究のレビュー
澤田いずみ	1997	小学校6年生の時に両親が離婚した14歳の男児の症例の検討。
棚瀬一代	2004	小6男児、小2男児、小3女児、小1女児の4つの事例による分析と検討
小田切紀子	2005	親の離婚を経験した16歳から22歳の子どもに11人に対するインタビュー調査。
社団法人家庭問題情報センター	2005	親の離婚を経験した子ども (10代から80代まで) 96人への質問紙とインタビューによる調査。

III. 結果

1. 海外における親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究

海外、特に離婚率の高いアメリカでは、親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究が多種多様にわたることが文献の検索を通して確認できた。また、このテーマについての見方も一様ではないことが理解された。ここでは、表1-1、2に記した先行研究以外の文献も紹介しながら、研究の目的や対象を念頭において、親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響に関して次の4つの視点からまとめてみた。(1)親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響は短期的であるという見解、(2)親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響は長期にわたるという見解、(3)年齢や性別による違い、(4)子どもの精神発達と父親の不在、とした。

(1) 親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響は短期的であるという見解

Hetherington (1984)は、親の離婚を経験した多くの子どもたちは、短い期間でその危機に対処し、適応することができる」と述べている。また、Cherlin et al (1991)は、離婚が子どもに及ぼす影響が、よく言われているように、途方にくれたものや悲観的であったりすることはないとしている。さらに、Gately et al (1992)は、

親の離婚を経験した子どもの中には、同世代の子どもや親が離婚する前と比べて、成熟性、自尊感情、共感性が向上したと報告している。むろん、離婚に対する子どもの適応は、家族の構成の変化だけでなく、家族機能の変化も重要であり、子どものストレスを受け止めるサポートシステムといった家族以外の社会的な環境も大切となる (Hetherington, 1980 ; Hetherington, 2003) という視点があり、カウンセリングやサポートグループなどの活用により、親の離婚によりもたらされた精神的な危機が軽減されることもあるだろう。子どもにとって、親が離婚することはつらい出来事であるが、両親の争いを頻繁に見せられ、その争いの渦中に巻き込まれることも、子どもにとっては不幸な事態である。諍いの絶えない家族関係から開放され、多少の時間をかけながら、新たな生活に落ち着くことも、子どもにとっては必要である。

(2) 親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響は長期にわたるという見解

その一方で、親の離婚が子どもの精神発達に長期にわたって深刻な影響を及ぼす場合があるという考え方もある。その代表的な研究者と言えるのが、離婚した家族とその子どもたちに対して縦断的な調査を行った Wallerstein であろう。1971年、彼女は、カリフォルニア州に住む離婚した60家庭の2歳から18歳までの131人の子どもたちにインタビュー調査等を行った。その結果、子どもの年齢によって示される心理状態は異なるものの、幼児に共通してみられたのは、退行現象や不安、乱暴な行為の出現であったと報告した (Wallerstein et al, 1975)。その後、Wallersteinは5年ごとに一人一人に追跡調査を行っており、親の離婚から10年経った際の調査結果として、多くの子どもたちが、たとえ成人しても親が離婚した当時の記憶を鮮明に保っており、悲しみや親への憤り、喪失感を持ち続けていたと述べている (Wallerstein, 1985)。また、特に女性は、将来子どもがいても離婚するのではないかと恐れていたという。この調査の対象となったのは、19歳から29歳の男女であり、青年期において恋人や結婚の対象となる相手ができただけで、今まで抑えられてきた親への怒りが湧き出し、親への葛藤が再燃してきたとも考えられる。さらに、25年後の調査の結果として、“子どもの悩みは大人たちの経験とは異なり、親の結婚の破局で頂点に達し、やがて収まるのではなく、親の離婚は子どもにとって累積的効果を及ぼす。その影響は子の発達の段階ごとに、新たにまた違った形で現れる”と指摘している (Wallerstein, 2000)。このような質的な研究については、量的な研究からみた批判はあるが (Amato, 2003)、長期的で縦断的な研究は親の離婚が子どもの精神発達に与える影響が決して一時的ではないということを実証するものである。

(3) 年齢や性別による違い

親の離婚が子どもの性別や年齢によって及ぼす影響には、どのような違いがあるのだろうか。Arnold et al (1990)は、1981年から1990年にわたる15の研究論文から、親の離婚を経験した子どもが示す反応について、離婚から2年間と離婚後4年から10年の2つの時期に分けて検討している。その結果、親の離婚時において子どもが未就学の場合は、初期の2年間は、親が離婚したのは自分のせいではないかという罪悪感、あるいは親から見捨てられ感、乱暴な行為、親が復縁するのではないかという願望がみられた。後期の4年から10年では、男児は学校での問題行動、女児は学業上の問題社会的能力の低下がみられ、男女ともに家族への憧れや空想がみられた。離婚時の年齢が就学した場合は、初期の反応では悲嘆や和解の空想、学業低下、母親に対する怒りが示された。後期の4年から6年は、男子は集中困難や学業不振、攻撃性、女子は性的関心の強さが認められ、男女ともに無力感や人間関係に期待しない傾向、離婚前の家族への憧れが示された。離婚時の年齢が青年期の場合、初期反応では男女ともに親の離婚の動機についての関心や怒り、抑うつがみられた。後期の4年から6年では、異性への敵対心、親身に世話をしてくれる大人への依存がみられた。

性別については、女児よりも男児に深い影響があるとする見方がある。Hetherington (1990)は、離婚あるいは再婚した家庭の男児(4歳から6歳)は離婚していない家庭の男児に比べて、問題行動を示すと述べている。Block (1986)も親が離婚した男児の行動には、衝動や攻撃性、感情表出の抑制の困難さがみられると報告している。

(4) 子どもの精神発達と父親の不在

親の離婚後にかかわらず、親が離婚をする前の段階においても、家の中で父親が不在となることは想定しやすい。子どもにとって父親との関係が希薄になることは、彼らの精神発達にどのような影響を与えるのだろうか。Santrock (1972)は、286の父親不在の家族と57の父親が同居する子どもとを比較し、知的能力を測る検査を行った。父親が不在の形態として、㉔死別、㉕離婚や妻子の不法な遺棄、別居、㉖ステップファミリー

一としての父親（義理の父親）の3つに分けている。その結果、離婚や妻子の不法な遺棄、別居による父親がいない子どもは、最初の2年間、もっともマイナスの影響が現れた。また、男児の方が、父親がいない女児あるいは父親と同居する男児よりも、知的能力が低いと報告している。

また、Loeb (1986)は、父親が不在の子どもは、大人の男性に対するイメージを持つことが困難となりやすく、父親の代理となるような人を捜そうとすると指摘している。また、Borduin et al (1987)は、父親が不在の場合の母子関係について、離婚をしていない家族と比べた場合、離婚を経験した母子関係に、争いが絶えないと報告している。Kleinman (1998)は、18歳から24歳までの115人の女子学生を対象に、MMPI-Ⅱの自我強度尺度 (Ego Strength Scale) を用いた調査を行った。被験者については、④父親と同居している、⑥父親の不在が死別による、③父親の不在が離別によるとし、離婚により父親が不在となったグループが、最も得点が低い結果となり、自尊感情も低い傾向がみられたと述べている。

2. 日本における親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する研究

一方、わが国において、同様のテーマに関する研究はどうであろうか。渡辺・吉田 (1985) は、離婚した親自身の対象喪失に対する悲哀の仕事が達成されない場合は、子どもの精神発達に深刻な影響を及ぼすと述べている。増井 (1986) は医師の立場から、親の離婚の経験を持つ思春期症例を対象として、子どもの思春期の精神発達に及ぼす影響について検討している。その結果、親の対象喪失が解決されていない場合は、子どもの精神的発達の難しさ（性同一性の問題）と対象喪失に伴う親子の葛藤としての愛情剥奪（自立における頼りなさの問題）を導き出せるとしている。また、土屋 (1992) は、親の離婚が児童の集団内での行動に及ぼすこととして、不安や抑うつ、衝動的な行動、暴力などの攻撃などの陰性の心理的影響がみられたと報告している。

その他に、佐々木 (1992) は非行少年と一般少年の実態調査を行い、親の離婚のみが非行の原因となる直線的な因果関係はないとしながらも、離婚後の親が子どもの情緒的な要求を満たすことができなければ、家庭外での緊張の処理を試みると指摘している。離婚を経験した親と子どもへの調査研究として、司法関係者が中心となって、臨床心理及び社会福祉の関係者がチーム委員会を作り、2005年に「養育環境の変化と子どもの成長に関する調査研究 — 離婚した親と子どもの声を聴く —」（社団法人家庭問題情報センター）として刊行されている。197の事例について質問紙と面接による調査が行なれており、わが国においては比較的、規模の大きい調査研究と言えるだろう。最近の心理臨床の分野では、幅広く離婚を経験した当事者や離婚家庭への援助という点から、小田切による一連の研究や報告が見られる（小田切、2001；小田切、2003；小田切、2004；小田切、2005）。

また、わが国における、親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響に関する研究の特徴であるかもしれないが、泉 (1994) による考察にみるように、家庭裁判所の関係者など司法の面からの報告が多いのが特徴である。だが、野田 (1998) が“子どもの発達による変化を予測できない司法の仕組み”と述べているように、当事者であるはずの子どもが蚊帳の外におかれている離婚調停のあり方に疑義がもたれていることも現状ではないだろうか。

いずれにせよ、海外の先行研究と比しても分かるように、全体的に親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響に関する研究は少ない。わが国において、この分野に関する研究は端を発していると言っても良いだろう。

IV. 今後の課題と展望

本稿では、親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響について、国内外の先行研究の概観を行った。ここでは、以上の先行研究を踏まえながら、わが国において、親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響について検討される際に、どのような課題があり、どのような議論の展開が期待されるのかという点について、次の4つの視点から考えた。

1. 親の離婚が子どもの精神発達に長期的な影響を及ぼさないための要因

親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響については、その内容や程度、期間の差こそあるものの、多くの研究者が陰性の影響をもたらすという提言を行っていることが理解された。親の離婚から、1年あるいは

は2年間といった離婚から間もない期間は、子どもが精神的に動揺し、生活態度や行動に変化を起こすのは、むしろ自然な反応である。だが、つらく悲しい時期を過ごすことはあっても、子どもにとって好ましい環境が整えられれば、時間の経過とともに、自らの力で回復していくことも事実であろう。親の離婚を通して子どもが受ける心理的な影響を緩和する要件として、子どもの側に立った生活環境の充実は抜きにできない。親の離婚を経験した子どもが、その危機を乗り越えるための要因に、どのようなものが深く関与しているのか、詳細に検討されることが必要であろう。

2. 親の離婚を経験した子どもの喪失体験と悲哀のプロセス

① 子どもの喪失体験

親の離婚によって子どもが失うものは、愛着と批判の対象であった片方の親との分離を伴う対象喪失である。子どもが親を失うことは、現実的な生活を営むうえで、彼らの発達課題の遂行にも影響を及ぼすことがある。例えば、思春期を例にあげてみると、子どもは自分の中にある親の価値観をいったん排除して自分の価値観を確立しようとする。その際、子どもは親から離れることへの寂しさや罪悪感にさいなまれることがある。このような葛藤を経験していくことが、思春期を生きる子どもの発達課題と言えるのだが、親の離婚に揺れる子どもの場合は、その課題を遂行することの難しさがつきまとう。そのような場合、皆川（1986）は、子どもは通常形で親への反抗をすることができず、自己吟味の機会を失うという発達上の危機に直面すると指摘している。

さらに、子どもにとって、親の離婚が要因となった転居や転校といったような生活環境の変化は、住み慣れた家や地域、仲の良い友人を失うという現実的・物質的な喪失をもたらす。それは、子どもなりに築いてきた精神的資産の喪失とも呼べるものであり、自己の価値を問い直すような重大な出来事となる。子どもにとって、このような幾重の喪失の体験が生み出す怒りの感情は生々しく体験されにくく、その感情を押さえ込むことにエネルギーが費やされてしまう場合は、無気力や引きこもりという非社会的な行動を呈することもある。昨今のわが国における不登校もそういった現象の一つと言っても良いだろう（野口、2005）。

Wallerstein（2000）の研究に見たように、親の離婚からもたらされた心理的な影響は時間の経過とともに風化する側面もあるが、子どもから思春期、そして青年期にいたる精神的な発達段階の局面において、心の中の隠し部屋に閉じ込めてきた親への葛藤が再燃する場合がある。これは、親の離婚を経験した子どもの精神的あるいは現実的な喪失体験が十分に癒されないまましていると、彼らの精神発達にも影を落とすことと言えよう。

② 悲哀のプロセス

子どもが親の離婚を乗り越えるための要因とも関連するであろうが、上記のような喪失の体験をどのように受け入れていくのかという、悲哀のプロセスも子どもにとっては重要であろう。

生涯を通して、人間が自己を問い直すような体験に出会った時、ある一定の反応を示すことはこれまでも研究がされてきた。例えば、Kubler-Ross（1969）は、癌という不治の病を宣告される人の過酷な喪失体験の進路プロセスについて、①否認、②怒り、③取り引き、④抑うつ、⑤受容という心理的軌跡を提示した。また、Bowlby（1980）は、近親者を失ったときの個人の反応について、①無感覚、②喪失した人物に対する思慕と探求（怒り）、③混乱と絶望、④さまざまな程度の再建という4つの段階を示し、人間が喪失を体験した後、「悲哀の過程」として、ある一定の心的過程を経験すると述べている。自分の死を覚悟することや近親者の死別と親の離婚による子どもの喪失体験は、必ずしも合致しないかもしれないが、子どもにとって親の離婚は存在を問われるという点で過酷な体験であると言える。

Stephen & Randy（1990）は、離婚を経験した子どもの悲嘆のプロセスについて、否認、怒り、取り引き、抑うつ、受容、希望をあげている。この喪失体験をめぐる悲哀のプロセスを考える際、子どもにとって、親との生き別れと死別とでは、「悲哀の仕事」（小此木、1979）を行ううえで大きな違いが生じる。それは、死別はもう一方の親と肉親の死に対する悲嘆や不安などの心の苦しみを共有することができるが、生き別れの場合には、親同士の感情がアンビバレントなことが多く、別れた側の親子で、もう一方の親への思いや喪失感などを支えあうことは困難と思われるからである。

だが、離婚したばかりの親同士には双方に感情のしこりがあっても、子どもは両親から愛されたい、必要

とされたいという気持ちを持ち続けることは当然である。白倉（2003）は、そのような子どもの心理的背景を“和合ファンタジー”としているが、親の離婚を経験した子どもの悲哀のプロセスを考えるうえでは重要な概念とも思われる。つまり、親の離婚に巻き込まれた子どもは、通常の喪失体験とは異なる特有の心理過程を経るとも言えるのではないだろうか。親の離婚を経験した子どもは、どのような喪失を体験し、どのような悲哀のプロセスを経ていくのかについて、より深く理解されなければならないだろう。

3. 父親不在の影響

親の離婚によって父親が不在することは、母親の子どもとの関係のあり方に変化を及ぼすことが考えられる。わが国の現状では、父親が不在することで、まず家庭の収入に大きな影響を及ぼすことが考えられる^③。経済的な困窮から母親がパートタイムで複数の仕事に従事するようになると、当然、母親と子どもとのかかわりは希薄になる。また、時間的な制限から夕飯をスーパーの惣菜で済ませるようになるなど、台所で料理をして子どもの帰りを待つといった母親らしい行為ができにくくなる。さらに、子どものしつけなど、母親が父親的な役割を担うことに苦慮する場面も生じる。このように、離婚後の母子家庭においては、母親が家族内の位置の重要性を占めることになり、それが強力な存在となってしまうと、子どもは母親に甘えたい時があっても、ガマンすることもある。また、強力な母親から呑み込まれる恐怖から逃れるために、理想化の対象として、家庭以外の場所で価値ある父親としての存在を求めることもあると考える。

父親の不在について精神分析的な見方をすれば、エディプス・コンプレックスの視点からみた検討が可能であろう。それは、男児の場合、母親への愛情と父親への憎悪を中核とするエディプス的解消の葛藤のため父親との同一視がなされ、それに伴い超自我が形成されると考えるならば、子どもの精神発達において、エディプス・コンプレックスは幼児が社会化して児童になっていく上で、最後に乗り越える課題の一つ（皆川、1985）とも言える。したがって、男児にとって父親は理想化しそして脱価値化していく対象であり、その対象が身近に存在しない場合は、精神発達において何らかの混乱をきたすことは考えられる。Blos（1985）は、子どもの発達上において、早期における子どもと母親、子どもと父親の関係を二者期と位置づけた。さらに、この二者期における父親の存在は、男児を母親との共生的な関係を調整し、エディプス期への道を整えるとした。いわば、男児が内的な世界から外的な世界へ関心を向ける時期において、“橋渡しの父”（廣井、2003）として存在すると言ってもよいだろう。だが、男児がその成長する段階において現実には父親がいない場合、例えば、学校では男性教師や男性のカウンセラーが父親的な代理人を補助的な役割を担うことも有効であろう。

女兒の場合はどうであろうか。Wallerstein ら（1989）は、親の離婚を経験した若い女性には両親の離婚によって人間関係に対する不安と恐怖心が潜在的に植えつけられており、それが青年期に表面化することを見出し“*sleeper effect*”と表現している。青年期においては他者との親密性が精神発達の課題であるが、若い女性にとっては父親との関係のありようが異性との関係に何らかの影響を及ぼすことも考えられる。

むしろ子どもの精神発達において父親の不在はマイナス面ばかりではない。両親の離婚という結末により、暴力的あるいは支配的な父親の束縛から逃れることができ、穏やかな日常生活を手に入れる子どももいる。また父親と離ればなれになっても、定期的に交流を持つことによって自らの成長を見守ってくれているという安心感が子どもの側に育てば、それは父親の不在を十分に補えることとなる。そのような配慮をどのような形で子どもに提供できるのかということが、離婚をする親にとっては重要になると考える。

4. 支援と介入のあり方について

Crespi（2005）は親の離婚を経験した子どもの6人のうち1人はアルコールの家族であるとし、親の離婚は家族の60%に影響を及ぼすと指摘した。グループカウンセリングは、学校において生徒にできる支援や介入の実施可能な方法の一つであると述べている。Garber（1992）は、心理治療における逆転移の反応について、死別を経験した子どもと親の離婚を経験した子どもを比べて検討を行った。親の死別を経験した子どもは彼らの精神発達に応じて、喪失の過程の幾つかのタイプを経験することを援助していけばゴールとなる。親の離婚を経験した子どもは、その事実を受け入れるようになることが重要であるが、親の離婚の意味することがあいまいであるという。

③ 厚生労働省雇用均等・児童家庭局「平成15年度全国母子世帯等調査結果報告」平成17年

Lopez (1991)は、親の離婚を経験した子どもたちは、罪悪感や怒り、ソーシャルサポートの喪失、両親の福祉への心配、金銭面の影響の心配、誠実さへの葛藤など、多くの問題に困惑していると指摘している。親の離婚を経験した子どもへの支援や介入のあり方について、わが国での議論はあまり多くのされていないが、今後はより多面的に検討される必要があるだろう。

おわりに

わが国における親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響に関する研究は、未だ検討されるべき事項が多いということが理解できた。親の離婚について悩んだり不安を抱える子どもたちに対して、周囲の大人たちが彼らのこころのありようについて理解を深めるとともに、より良い環境を整えることが大切であろう。今回の知見を糧とし、さらに研究を深めていきたい。

<文献>

- Amato PR, Keith B (1991) Parental divorce and adult well-being: A meta-analysis. *Journal of Marriage & the Family*, 53 (1), 43-58.
- Amato PR, Keith B (1991) Parental divorce and the well-being of children: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 110 (1), 26-46.
- Amato PR, Booth A (1991) Consequences of parental divorce and marital unhappiness for adult well-being. *Social Forces*, 69 (3), 895-914.
- Amato PR (2003) Reconciling Divergent Perspective: Judith Wallerstein, Quantitatives Family Research, and Children of Divorce. *Interdisciplinary Journal of Applied Family Studies*, 52 (4), 332-339.
- Arnold LE, Carnahan AJ (1990) Child divorce stress. Arnold LE (Eds) *Childhood stress*. A Wiley—Interscience Publications John Wiley & Sons, Inc, pp373-403.
- Baum CG (1989) Conduct disorders. *Handbook of child psychopathology* (2nd ed.) Ollendick TH (Ed); Hersen M (Ed), Plenum Press, 171-196pp.
- Block JH (1986) The Personality of children prior to divorce: A prospective study. *Child Development*, 57 (4), 827-840.
- Blos P (1985) *Son and Father: Beyond the Oedipus Complex*. Macmillan. 児玉憲典 (訳) (1990) 息子と父親—エディプス・コンプレックス論を超えて—青年期臨床の精神分析理論 誠信書房
- Borduin CM, Henggeler SW (1987) Post-divorce mother – son relations of delinquent and well-adjusted adolescents. *Journal of Applied Developmental Psychology*, 8 (3), 273-288.
- Bowlby J (1980) *Attachment and Loss*, Vol.3. 黒田実郎・岡田洋子・横浜恵三子 (訳) (1981) 母子関係の理論Ⅲ—対象喪失 岩崎学術出版社
- Buchanan CM, Maccoby EE, Dornbusch SM (1991) Caught between parents: Adolescents' experience in divorced homes.
- Cooney T M, Smyer M A, Hagedsted G O, Klock R (1986) Parental divorce in young adulthood: Some preliminary findings. *American Journal of Orthopsychiatry*, 56 (3), 470—477.
- Crespi T D, Gustafson AL, Borges SM (2005) Group counseling in the schools: Considerations for child and family issues. *Journal of Applied School Psychology*, 22 (1), 67-85.
- Fine M, Moreland JR, Schwebel AI (1983) Long-term effects of divorce on parent-child relationships. *Developmental Psychology*, 19 (5), 703-713.
- Frasciello LM (1995) Anorexia nervosa in males: A case report and review of the literature. *Clinical Social Work Journal*, 23 (1), 47-58.
- Furstenberg, F E, Cherlin A (1991) *Divided Families*. Harvard University Press.
- Garber B (1992) Countertransference reactions in death and divorce: Comparison and contrast. *Residential Treatment for Children & Youth*, 9 (4), 43-60.
- Gately D, Schwebel AI (1992) Favorable outcomes in children after parental divorce. *Journal of Divorce & Remarriage*, 18 (3-4), 57-78.

- Harvey JH (2002) *Perspective on Loss and Trauma-Assaults on the Self*. Sage Publications, Inc. 和田実・増田匡裕 (訳) (2003) 喪失体験とトラウマ 北大路書房
- Hetherington EM (1976) Divorced fathers. *Family Coordinator*, Vol25 (4), 417-428.
- Hetherington EM (1980) Divorce, a child perspective. *Annual Progress in Child Psychiatry & Child Development*.
- Hetherington EM (1984) Stress and coping in children and families. *New Directions for Child Development*, 24, 7-33.
- Hetherington E M, Cox M, Cox R (1985) Long-term effects of divorce and remarriage on the adjustment of children. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*, 24 (5), 518-530.
- Hetherington EM (1990) Coping with family transitions: Winners, losers, and survivors. *Annual Progress in Child Psychiatry & Child Development*, 221-241.
- Hetherington EM (2003) Social support and the adjustment of children in divorced and remarried families. *Childhood: A Global Journal of Child Research*, 10 (2), 217-236.
- 廣井いずみ (2003) 第2の固体化期において「橋渡し」としての父を体験すること. *心理臨床学研究*, 21 (5), 484-495.
- 泉ひさ (1994) 親の離婚が子どもに与える心理的影響. *アカデミア*, 人文・社会科学編, 南山大学, 59, 177-197.
- Kalter N, Rember J (1981) The significance of a child's age at the time of parental divorce. *American Journal of Orthopsychiatry*, Vol.51 (1), 85-100.
- Kleinman N (1998) The effects of father-absence during childhood on adjustment in young adult females. *The Science and Engineering*, 59 (4-B). pp 1885.
- 野田愛子 (1998) 親の離婚の子どもに及ぼす長期的影響. *ケース研究*, 256, 2-14.
- Kuehn E (2001) *Divorce-Finding a place*. Capstone Press. 汐見稔幸・田中千穂子監修, 上田勢子 (訳) (2004) 親の離婚—居場所を探して大月書店
- Kubler-Ross E (1969) *On Death and Dying*. 川口正吉 (訳) (1971) *死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話—読売新聞社*
- Loeb L (1986) Fathers and sons: Some effects of prolonged custody litigation. *Bulletin of the American Academy of Psychiatry & the Law*, 14 (2), 177-183.
- Lopez F G (1991) The impact of parental divorce on college students. *New Directions for Student Services*, 54, 19-33.
- 増井玲子 (1986) 思春期神経症患者に及ぼす親の離婚の影響に関する研究. *九州精神医学*, 32 (2), 87-101.
- 皆川邦直 (1985) 発達の基本的観点, 小此木啓吾他編 *精神分析セミナーV*. 岩崎学術出版社.
- 皆川邦直 (1986) 思春期と精神療法 清水將之 (編著) *教育現場に活かす思春期問題への医学的アプローチ* ライフサイエンスセンター pp244-259.
- 野田愛子 (1998) 親の離婚の子どもに及ぼす長期的影響. *ケース研究*, 256, 2-14.
- 野口康彦 (2006) 親の離婚による喪失体験を伴った不登校男子生徒の心理過程—スクールカウンセラーの立場から. *中央学術研究所紀要*.
- 野口康彦 (2006) 親の離婚が子どもの精神発達に及ぼす心理的影響に関する一考察—日本における離婚の統計資料の分析から—. *法政大学大学院紀要*.
- 小田切紀子 (2001) 心理学的観点から見た離婚. *Science of humanity of Bensei*, (37), 14-19.
- 小田切紀子 (2003) 離婚に対する否定的意識の形成過程: 大学生を対象として. *発達心理学研究*, 14 (3), 245-256.
- 小田切紀子 (2004) *離婚を乗り越える—離婚家庭への支援を目指して—*ブレーン出版
- 小田切紀子 (2005) 離婚家庭の子どもに関する心理学的研究. *応用社会学研究*, 15, 21-37. 東京国際大学社会学.
- 小此木啓吾 (1979) *対象喪失* 中公新書
- Paterson WA (1997) The unbroken home: Five cases studies of single-parent mothers. *Dissertation Abstracts International Section A: Humanities and Social Sciences*, Vol58 (1-A), pp0089.
- Reifman A, Villa LC, Amans JA, Rethinam V, Telesca TY (2001) Children of divorce in the 1990s: A meta-analysis.

Journal of Divorce & Remarriage, 36 (1-2), 27-36.

佐々木美智子 (1992) 日本の離婚と子どもの実態 有地亨・老川寛 (編著) 離婚の比較社会史 三省堂 pp267-297.

Santrock JW (1972): Relation of type and onset of father absence to cognitive development. Child Development, 43 (2), 455-469.

社団法人家庭問題情報センター (2005) 養育環境の変化と子どもの成長に関する調査研究—離婚した親と子どもの声を聴く—.

澤田いずみ (1997) 両親の離婚を契機に不登校となった男児への援助—家族システムの変化に焦点を当てて—札幌医科大学保健医療学部紀要, 1, 63-67.

白倉賢二 (2003) 離婚問題と親子関係. 月報司法書士, (373), 2-7.

Sorosky AD (1977) The psychological effects of divorce on adolescence. Adolescence, Vol12 (45), 123-136.

Stephen M, Randy S (1990) Divorce Recovery for Teenagers. Youth Specialties, Inc.

棚瀬一代 (2004) 離婚の子どもに与える影響—事例分析を通して—京都女子大学現代社会研究, 6, 19-37.

土屋伸子・高橋彰久・池田由子 (1992) 両親の離婚が児童の集団内での行動に及ぼす心理学的影響 日大医誌, 51(1), 97-104.

湯沢雍彦 (2003) データで読む家族問題. NHKブックス.

Wallerstein JS, Kelly JB (1975) The effects of parental divorce: Experiences of the preschool child. Journal of American Academy of Child Psychiatry, 14 (4), 600-616.

Wallerstein JS (1985) Children of divorce : Preliminary report of a ten-year follow-up of older children and adolescents. Journal of American Academy of Child Psychiatry, 24 (5), 545-553.

Wallerstein JS Blakeslee S (1989) SECOND CHANCE. Ticknor & Fields, Inc, New York. 高橋早苗 (訳) (1997) セカンドチャンス 離婚後の人生. 草思社.

Wallerstion JS (2000) The unexpected legacy of divorce. Carol Mann Literary Agency, New York. 早野依子 (訳)

(2001) それでも僕らは生きていく—離婚・親の愛を失った25年間の軌跡—P H P

渡辺久子・吉田直子 (1985) 親との離別とその後の家族過程が子どもの精神発達に及ぼす影響. 家族療法研究, 2, 64-69.

Weiner J, Harlow L, Adams J, Grebstein L (1995) Psychological Adjustment of College Students from Families of Divorced. Journal pf Divorce & Remarriage, 23 (3), 75-95.